

## 第8回

個人部門 最優秀賞

「水田環境と農業を見つめて…」

熊本県 鹿本農業高等学校3年

高松正典さん

「日本、そして世界に環境保全型農業を広げたい！」それが私の大志であり、夢である。

私は3年間、鹿本農業高校バイオ工学科に在籍し、地域環境と農業との共存を目指す活動に取り組んできた。この活動は、「環境保全型農業を実現したい！」という想いから、地域農業との共同研究に広がり、少しずつ成果が形となり始めている。その活動の一環で、昨年、日本人の農と食を支える水田の環境がどのような状態にあるのかを知るため、水生生物である「ジャンボタニシ・ヤゴ類・カブトエビ・ホウネンエビ」を指標とした水田環境調査を実施した。中でも「カブトエビ・ホウネンエビ」は、農業等の影響を受けやすく、絶滅が危惧されている生物である。

梅雨明けした平成十七年七月中旬、山鹿市鹿本町全域の水田約四百ヘクタールを対象に調査を実施した。調査を行った日は暑い一日であったが、軽い熱中症に陥りながらも取り組み続けた。その結果、ジャンボタニシがほとんどの水田に見られ、ヤゴ類・カブトエビは全体の約六%、ホウネンエビは1%にも満たない分布結果となった。

また、一方で、土壌微生物とホウネンエビに対する農薬と化学肥料の影響を調べた。各サンプルに使用基準最低濃度に薄めた農薬と化学肥料を添加すると、最低濃度にも関わらず、土壌微生物は徐々に減少し、ホウネンエビは次第に動きが鈍り、死んでいったのだ。

一見、緑豊かな水田環境ではあるが、

その置かれた現状に驚きを隠せず、「このままで良いのだろうか？」という疑問を抱き始めた。そのような中、無農薬無化学肥料栽培に取り組む本校水田には、カブトエビ・ホウネンエビが生息し、絶滅危惧種<sup>1</sup>類のドジョウも確認できた。このことから、安全・安心な食料生産から環境保全型農業へつながる活動を継続すれば、崩れてしまった生態系ピラミッドも地道な農業活動で再生できるとがわかった。

しかし、その理想が打ち砕かれ、厳しい現実に向面する事があった。それは、研究の一環で取り組んだ、「無農薬無化学肥料の水稲・野菜栽培」での出来事だ。理想を持ち取り組んだ無農薬無化学肥料による栽培は、想像以上に実行が難しく、水稲にはハマキガの幼虫、キャベツにはアオムシやヨトウムシなどの害虫が大量に発生し、「環境保全型農業は、やはり無理なのか？」と挫折しそうになった。しかし、再度の研究と入念な農作業によりこの研究は成功裏に終わった。農家の安定経営のため、農薬や化学肥料に頼るのは仕方のない部分もある。しかし、環境への影響を考えると、減農薬減化学肥料栽培から環境保全型農業に取り組む必要があると確信したのである。そして、その想いで栽培した、安全・安心な作物を農家が胸を張って提供することこそが、本来の農業の姿であると感じたのだ。

これらの活動の中で見えてきた大切なこと。それは、「環境と農業」を意識した生活を送ることだ。例えば、身近な田んぼを覗き込み、生き物を探し、また、そこで出会った農家の方々と語り合うこと。一粒の種から生まれる植物の生命を感じ、食と命を大切にすることを育むこと。それが環境保全型農業への第一歩な

のだ。そして、農業高校で学ぶ私たちが環境と農業の調和を形造る礎となり、この想いを伝える実践活動を地道に継続する必要があると確信した。

このような取り組みから、私は一つの大きな夢を抱いた。それは、農業高校の卒業生を中心に組織する、環境保全型農業に関する組合を作り、日本においての環境保全型農業の在り方を発信していきたいということだ。そこから、地域社会や次代を担う子ども達を始めとする多くの人に、環境保全型農業の大切さを伝えていきたいと考える。

そのためにも、現在の水田環境から農業を見つめ、日本、そして、世界へと環境保全型農業を広げる事を目標とし、更なる研究活動に取り組んでいきたいと私は決意した。

個人部門 優秀賞

「繋がる生き方〜人生を奏でること〜」

広島工業大学付属広島高等学校2年

平田 直之さん

人生は一つの大曲に置き換えられる。  
『一人一パートずつ割り振られ、「社会」という大きなステージに立ち、「人生」という楽曲を演奏する。その楽曲が集まってさらに「人間という種」の楽曲を作り、命のあるものもないものも全ての楽曲が合わさって、「地球」、さらには「宇宙」という、果てしなく続く楽曲を作る。』

そう思い始めたのは、僕が音楽に興味を持ち始めてすぐか、その間近だったと思う。なぜ人は音楽を欲するのか。その謎に一步近づいたようで、嬉しくなったのを覚えている。きっと人間は、音楽に人の一生を見るのだろう。無意識に自分と重ね合わせ、その展開に涙したり、時には歓喜に打ち震える。人間と音楽は似たもの同士なのだ。だからお互いに惹かれあい、引き寄せ合うのだろう。僕はここに充実した人生を送ることのヒントを得た。

僕が考える人生とは、いわゆる繋がりである。まず、「音符」という個人の行動が繋がって「旋律」になる。おそらく、個人の行動一つ一つは単なる「音符」であるだけで、そこにあるだけではまったく意味を成さないのだろうと思う。時間という横の軸の上に順番に並べて初めて、「音符」に「旋律」という意味が付加されるのだ。そして、その「旋律」が波になって一つのパートを描き、そのパート同士が絡み合い、相互に関係を持ちながら一つの楽曲、その人生が構成されていき、そこで初めて楽曲は渦を巻き、情熱的に火を噴くのである。

繋がりという要素を包含しているが

故に、洗練された楽譜は何よりも美しい。それこそ僕はピカソやゴッホといった巨匠達の絵画に匹敵するほどであると思う。そこには昔の人生を音として正確に記しており、絵画同様にそこに深さを見い出すことが出来る立体性を兼ね備えているのだ。楽譜を読み上げた後、僕がなんともいえず満ち足りた気分になるのは、おそらくその楽曲が単純に良い物であるというだけではなく、なんというか、自己の深奥に輪廻転生のサイクルの一つを受け持つ、音楽のパズルを組み込むことで成立するような意識があるからなのだろう。

そんなすばらしい音の人生を自らの手で綴ってみたい、という衝動から僕はいつからか曲を作るようになった。作曲音を紡ぐということ。それは意識的に未知の領域を開拓していく行為であるが、それもまた自己の中から生まれ出た既知の集合体であるため、新鮮でありながらかつどこか懐かしく感じるものである。作曲とは一つの人生を想像し、楽曲の一生を創造する行為と相似形なのだ。自らの過去や現実、未来を体と心で感じながら、そこにある空間や、その場に残在する物質全てに至るまでを呑み込んで消化し、一つの人生へと昇華させる行為であると考える。この行為は、自分の人生とイコールであると思うのだ。それゆえに僕は音に対して、より多くの情報を欲し、繋がりを感じ、厚みを欲する。そして、相互の働きかけに細心の注意と、その曲への最高の敬意を払うのである。

人生をより充実したものにするために、僕は僕の人生をうまく演奏しようと思う。僕は自分の人生を走り続けながら、楽曲を奏で続けるのだから。僕はそれを決して後悔するような作品にしたくはない。その為には、他のパートたる他者

との関わり合いに全力で関わり合うことが必要になる。一人として無駄なパートを持った人はいない。だから、相手を信じて近づくことが自分の旋律を作り上げる事になる。身勝手な考え方であるかもしれないが、積極的に人と触れ合うことで、自分の楽曲を厚みのある音に、自分の人生を厚みのあるものにした。その一心で明日からも僕は曲を作り続け、人生をより素晴らしいものに紡ぎあげていこうと思う。

グループ部門 最優秀賞

「地道にねばり強く諦めずに

私たちができることパートⅡ」

山口県立厚狭高等学校

西村早苗さん 山下弥優さん

山本里亜さん

「グリとグラ」「こぐまちゃんのおトケーキ」「アンパンマン」。私たちの前に厚狭高校生や先生方から寄付された絵本が積み上げられた。幼い頃の思い出が蘇える。お気に入りの絵本のページを何度も何度もめくった。母や幼稚園の先生に読んでとせがんだ。私たちの幸せな思い出。日本の一般的な家庭に生まれ育った私たちであれば、誰もが絵本にまつわる思い出を持っている。そして、その思い出が高校生になった今でも、私たちの心の成長を支えてくれている。しかし、そんな幸せな経験を世界のすべての子ども達が持っているわけではない。世界では、三秒に一人の子どもが防げるはずの病気で命を落とし、一億二千万人の子どもが初等教育を受けられず、二億五千万人の子どもが廃止されるべき児童労働に従事している。

私たちのできることは限られている。それでも、微力であっても私たちにできることを諦めずに取り組んでいきたい。そんな思いで、貧困の中で闘い続けている子ども達に夢をプレゼントしたいと寄付された絵本の英訳を始めた。

昨年、私たち厚狭高校新聞部は、文化祭で貧困に苦しむ子ども達への支援をスタートした。募金や手作りの絵葉書や文集を販売した売上金をフィリピンのペレーズという貧困地域の子どもたちが学ぶダイケアセンター（未就学児の教育施設）に贈った。しかし、文化祭だけで終わらせたくないというのが部員全員の思いだった。文化祭終了後、次への

ステップを模索していた。そんなとき、ペレーズの子ども達からお礼の寄せ書きが届いた。その素直な表現は私たちを元気づけてくれた。そして、こんな素敵なペレーズの子ども達に、更にプレゼントをしたいと考え始めた。私たち高校生らしいプレゼントは？と模索する中で、私たちの活動の原点となった『世界がもし百人の村だったら』を読み返し、次の言葉に出会った。「子どもが、子ども時代をうばわれることは、人類が生きのびるのに欠かせない、しあわせの記憶が、うばわれることです」。私たちの子ども時代の思い出を語り合う中で絵本や紙芝居が話題になった。そして、皆の頭にひらめいた。「ペレーズの子ども達に絵本と紙芝居をプレゼントしよう！」と。

早速、問い合わせたところ、「お金の支援もとても嬉しいですが、あなたたちが高校生としてできる高校生らしい支援はもっと嬉しいです」という返答だった。ペレーズの子ども達は絵本を手にするのはほとんどなく、紙芝居もないので大喜ぶだろうとのことだった。絵本は英訳してあれば、ダイケアセンターの先生たちが、読み聞かせることもできるということだった。英訳なら私たち高校生にとって可能だった。私たちに新しい大きな目標が生まれた。

まず、厚狭高校生や先生方に家庭に眠っている絵本を寄付していただくことにした。絵本募集の広告を作り、絵本集めを始めた。ポスターを貼った段ボール箱を教室や図書館の前などに設置した。「持ってくるの大変だったよ」と笑顔で言いながら、何冊も寄付してくれた級友。「これ大好きだった絵本だけど」と大切にしていた絵本を寄付してくれた先輩、「子ども達も大きくなったから」と新品同様に見える絵本を寄付してくださっ

た先生などの温かい心に支えられて、多くの絵本が集まった。

次の作業は、絵本の英訳。最初は辞書を使って、自力で翻訳をしていたが、途中からインターネットの翻訳機能をサポート役として活用した。しかし、それでも、絵本なので擬音語が多く、主語も省略されがちなので翻訳するのは困難を極めた。毎日、放課後、図書室に集まって、三人一組で翻訳に悪戦苦闘した。ときに時間を忘れて取り組んでいて、気がつくと学校中真っ暗で、図書館だけにあかあかと電気がついていて、残っている生徒は新聞部だけという日も何回もあった。絵本の日本語を他の日本語に書き換えてみて、最もぴったりくるものを訳したり、文章を出来るだけ短く分かりやすくしたり・・・。英訳に取り組んでみて、逆に日本語の難しさを感じたのもよい経験だった。翻訳にかかった歳月は十二月から四月まで。真冬から取り組んで、気がつけば、春になり、私たちは二年に進級していた。

翻訳を終えると、次に絵本の日本語を隠してシールを貼りその上に英文を書く作業に取り掛かった。綺麗に見えるようにシールの大きさを工夫したり、効率良くするために皆で分担して約三ヶ月かけて完成させた。

絵本の翻訳を終えてからは、絵本の英文のシール作りと同時進行で紙芝居の製作にとりかかった。題材は日本昔話を選んだ。その理由はペレーズの子ども達に日本の文化にも触れて欲しかったからだ。そして、多くの昔話の中で、「浦島太郎」と「かぐや姫」を選んだ。「浦島太郎」はペレーズは海辺の村であり日本の海辺にまつわるお伽話を子ども達にプレゼントしたいと考えての選択。「かぐや姫」は日本で一番古い日本のお

伽話の起源であり、ペレーズにも月は出るだろうから、子ども達に月を見つめて夢を育んでほしいと考えての選択。この二つの昔話を全体を五つの場面に分けて製作をスタートした。新聞部には絵が上手な人が二人いるので、絵の具等を使って描き上げていった。そして、完成した絵の裏に英文をシールに書いて貼る作業を行った。長い文章からどの場面を取り上げれば良いのか悩み、少ない時間で一枚一枚を仕上げるのは大変な作業だった。絵を担当した二人は、最後には放課後だけでなく昼休みも絵の完成に向けて取り組んでいた。紙芝居も約三ヶ月で完成した。

すべての作業を終えたとき、私たちの二回目の文化祭が近づいていた。昨年も一緒にフィリピンへの支援に取り組んだ図書委員会や支援金のための絵葉書作りに参加してくれた厚狭高校生から、今年もペレーズの子ども達への支援に協力したいと申し出を受けた。

そこで、新聞部でも、多くの人に世界の貧困に苦しむ子ども達の現状を知ってもらい、更にペレーズのことを知ってもらい、支援の輪を広げるための文化祭の取り組みを開始した。完成した英訳絵本と紙芝居もすぐに贈らずにまず文化祭に展示した。また、同時にペレーズから写真を送ってもらい、人々や行事の様子を写った写真の展示をした。また、フィリピンの民族衣装、教科書、おもちゃ、人形などフィリピンの文化を伝える品々も展示した。写真には、一枚一枚の説明をつけた。そして、フィリピンで最もポピュラーな音楽も流した。更に、フィリピンの貧困について調べたことを大判用紙にまとめ展示した。また、フィリピンだけでなく、世界の事情を知ってもらうために世界各国の新聞を収集し

て、大陸別に分けて展示した。ペレーズの  
のデイクアセンター卒業式の写真では、  
屋外で行われているのだが、胸に大きな  
リボンをつけて誇らしげにしている子  
どもの姿は会場を訪れた方々の微笑み  
を誘っていた。日頃見ることのない、フ  
イリピンの文物も保護者の方を中心に  
興味をもっていただけたようだった。ま  
た、社会科の先生が熱心に世界の新聞を  
見られていた。女性の先生は英訳された  
絵本を手にとられて、「私も昔子どもに  
読んでやりました。ペレーズの子ども達  
もきつと喜ぶね。」と声をかけてくださ  
った。準備はとて大変だったけれど、  
多くの人に世界の現状や貧困に苦しむ  
子ども達の様子、そして、支援の必要性  
を知ってもらうことができたように思  
う。文化祭終了後の充実感は昨年以上だ  
った。

図書委員会からも昨年同様の古本市  
と絵葉書販売の売上金を支援金として  
提供された。文化祭が終了した六月の末、  
絵本と支援金をペレーズに贈ることが  
できた。

絵本の翻訳を通じて、私たち自身も、  
多くのことを学ぶことができた。世界の  
多くの逆境に立ち向かっている子ども  
達の存在は私たちを励ましてくれる。私  
たちは、ペレーズの子ども達と出会うこ  
とがなければ、毎日をただなんとなく過  
ごすだけで、世界の貧困と闘う子ども達  
の現状を知る機会は無かつただろう。ニ  
ュースや新聞で、世界のあらゆるところ  
で悲惨な事件が起きているのを見ても、  
子ども達の大変な状況を知っても、悲し  
い気持ちになるだけで、私たちが出来る  
事は何も無いと諦めていただろう。しか  
し、私たちはペレーズの子ども達に、前  
進することの素晴らしさを教えてもら  
った。そして、世界の子ども達の事を知

れば知るほど、私たちが励まされた。  
中国の極貧の村出身で、様々な支援の結  
果幸いなことに進学できた馬燕ちゃん  
は、「将来はジャーナリストになって貧  
しい子ども達を支援したい」と夢を膨ら  
ませ、内戦が続いたアフリカのスーダン  
で爆弾の破片で両手を失ったロビール  
君は、「学校に行きたい。そして将来は  
牧師になって困っている人を助けたい」  
と頑張っている。その姿は私たちに喝を  
入れてくれた。

毎日、当たり前のように学校に通って  
いる私たちにとっては何げない一日が、  
世界の貧困や災難の中で生き抜いてい  
る子ども達にとっては、命がけの一日だ  
ということをしつかり認識していきたく  
いと思う。一人でも多くの人々に世界の  
子ども達の実情を知ってもらって、考え  
応援してくれる人を増やしていくこと  
が大切だ。

私たち一人ひとりの力は小さくても、  
日本の、世界の、多くの人が貧困や災難  
と闘う子ども達のために第一歩を踏み  
出せば大きな力になっていく。それを信  
じて、全ての人が自分達に出来る事をス  
タートしてほしい。その輪を広げていく  
ことが私たちに出来る事だと思ってい  
る。世界の全ての子ども達に幸せになる  
日を信じて地道に粘り強く諦めずに活  
動を続けていきたい。

グループ部門 優秀賞

## 『萌え』から見る

### ネットワーク上の人間構造

広島県立広島国泰寺高等学校

堀野豊さん 松本玲央奈さん

宮本真吾さん 道本尚樹さん

一、はじめに

近年、「萌え」という言葉が広く世間に知られるようになり、日常的な会話にも上るようになった。この流れの要因は、書籍、映画、ドラマの各メディアにおいて成功を収め、社会的に大きな反響を呼んだ『電車男』に因るところが大きい。ドラマの中で主人公が自分の好きなアニメのキャラクターに向かって「萌え」と叫んでいた姿を覚えている人も多いだろう。彼はその後彼女ができるのだが、面白いことにその彼女に対しては「萌え」を使うことはない。彼は漫画やアニメを熱狂的に愛好するいわゆる「オタク」である。「萌え」は、彼だけでなく、彼と匿名掲示板において交流を行う人物達の口にもしばしば上った単語であった。

『電車男』の大ブレイクとともに広く認知され、二〇〇五年流行語大賞にもなった「萌え」であるが、その意味するものは一般的に認知されておらず、「オタク」の言葉というイメージもあいまって、どこか得体の知れない言葉というイメージをまとって社会的に認知されている感は否めない。「オタク」をひきつけ、社会にも少なからず影響を与えているこの「萌え」という概念の本質、そしてその示すものとは何なのであろうか。

### 二、「萌え」の経済効果

「萌え」を知らない人には、「萌え」について考えることの意味が理解でき

ないかもしれない。そこで、「萌え」が実社会に及ぼしている影響について考えてみた。実は「萌え」は経済市場という観点から見れば、すでに今日の日本に根付いていると言ってもよいのである。

「萌え」は漫画等の書籍、アニメ等の映像、そしてゲームの分野において発達していると考えられている。浜銀総合研究所が行った調査によると、大人の「萌え」の場合、これらの三分野では総計八百八十八億円もの市場が出来上がっているという。子ども向けのものも考慮に入れるとこの額は遥かに大きなものになる。「おジャ魔女ドレミ」や「ふたりはプリキュア」は子ども向けに制作されたものが「萌え」アニメとして成功した例であり、大きな商業収入があったと聞く。ここから、萌え市場は、非常に大きな市場に成長したと見て間違いない。

また、「萌え」消費者層はインターネットに因る情報の発信能力が高く社会に対しての影響力が強いことや、各分野に重複して集団を成していることもわかっており、自分の価値観に基づいて金銭や時間にとらわれることもなく行動している。つまり、「萌え」消費者層は、購買意欲が高いだけでなく、集団形成時の核としての役割、また近い未来の経済の行方を決めるという意味では期待できる大きな存在であると言える。そうすると、現在、この国における「萌え」市場は、経済の根幹の一部分を担っていると言えるだろう。

### 三、「萌え」の歴史・起源

「萌え」の起源は、一九九〇年代初頭ごろとされており、発生から十五年程の間使われ続けてきた概念である。この「萌え」という表記については、まったく新規に発生したとするものと、既存の

隠語を継承した後に発展したとする二説が存在する。本来、「萌える」という単語自体は奈良時代にはすでに存在していた古語である。実際に、古典の先生に「萌え」という言葉について質問したところ、万葉集の志貴皇子による歌、「石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」を挙げてくださった。この歌を現代語に訳せば「岩を流れる滝のほとりのワラビが早くも芽を出してくる春になったよ」となり、ここでの「萌える」は「芽吹く」という意味で用いられている。この「芽吹いた」ばかりの幼いイメージを表す元来の単語の意味になぞらえ、主に未成熟な対象を指定して形容する新規の隠語として成立したとする説。この説は新規発生説と呼ばれている。もう一説は、一九八〇年代から「オタク」の交流の場において使用されていた、支持や傾倒、執着などを意味する隠語「燃え燃え」が偶然のパソコンでの誤変換、もしくは意図的な変更により同音の「萌え萌え」と表記されるようになり、のちに短縮され「萌え」として成立したとする説がある。この説は継承説と呼ばれている。

両者ともほぼ同等の根拠があり、どちらが起源であるかを決定づけることは難しい。しかし、どちらの主張においても初期の段階においては、アニメ・漫画における少女に対するものであったようだ。

#### 四、「萌え」の対象

使用され始めた初期においては、その使用範囲が専らアニメ・ゲーム・漫画等に登場するいわゆる二次元キャラクターに限定されていた「萌え」であったが、現在においては対象となるものは実に幅広い。近年の社会への浸透、つまり、

ネットワーク技術の急激な進展による認知度の向上や、いわゆるオタク層以外の「萌え」を認知する人間の増加に伴い、その使用範囲は実在する人物などにもまで拡張され、使用自由度が高くなってきているようである。その自由度による実体のつかみにくさが「萌え」に対する理解をいささか阻んでいるともいえるだろう。

「萌え」の対象として認識されるものとしては、キャラクターが直接備えている特長はもちろんのことであるが、物事におけるストーリー、シチュエーション等の非物質的なものまであげることができる。ここで重要となるのは「萌え」を使う人間が一般的に近いとされる「好き」という単語と「萌え」の動詞形「萌える」を明確に区別し、その相違を意識して利用している点である。つまり、「好き」の対象は、少なくとも他者にその意思を伝達するため公言する上では、好意の感情の総体を表すのに対し、「萌える」においては、一部の人間における特化した好意に用いられる。それは必ずしも集団内で多数者とは言えない人間の、一般的同意を得ることが難しい好意なのである。

その例としては、ロボットや幽霊等の非人間に対するものや、恋愛の対象とならないはずのあまりに幼い少女へのもの、また一般的な倫理に反する近親愛などがあげられる。つまり、「萌え」の対象は、インターネットという実生活よりも遥かに多くの人間と触れ合うことが可能な空間。かつ同一の嗜好を持つ不特定多数が思想を共有する空間においてのみ、語ることが可能であったと考えられるだろう。社会的にみて少数だが、その対象に対する思考を共有しているという確証を得、また与えるためのキーと

して「萌え」という言葉は使われたのだと考えられる。「オタク」の一般認知が進み、現実世界へ浸出してきている現在においても、このことは基本的に変化していないことだといえるだろう。総じて言えば、「萌え」の対象となるのは同一かつ特殊性の高い価値観を持つ、マイノリティの嗜好因子である。

##### 五、萌えの現在と未来

前述のように私たちは「萌え」を、マイノリティによって共有される特殊な嗜好因子を表す概念と位置づけた。これによってわかるものは何だろうか。

古くから日本人は農耕主体の民族であるという特徴から、個人の意志を犠牲にしても全体の協調性を守ろうとする傾向がある。これが結果的に事なかれ主義につながり、世界的に日本人は積極性に欠けるとみられる原因となっている、という考え方もある。

このような民族的特徴を持つといわれる日本人が、自らの特殊性の強い嗜好を周囲に公言することは難しかったと考えられる。現実の世界では、様々な嗜好を持った人がいたとしても、一堂に会したときそのベクトルがばらばらであれば、公言する者は少数者となってしまう。欧米諸国が社会の一部の個を尊重するのに対し、日本では特異な個は好まれない傾向だったといえるかもしれない。しかし、近年のネットワーク技術の発展・一般化によってその状況は一変した。不特定多数によるネットワーク上のコミュニティに集合することで、同一の嗜好を持つ者もはや少数とは言いがたいまでに集まるようになったのだ。

これは、無知の中にいた急激な反動的知識欲の爆発と言ってよい。それまで少数者として区別され、「公」の場では口

をつぐんでいた者がネットワーク上において自らが必ずしも少数者ではないことを認識した。のみならずそのネットワーク上のコミュニティを構成する各個人は、その感情を互いに共有することを強く求めたのだ。そしてその共有の証として使用した記号が「萌え」だったのである。「萌え」は、インターネットのインフラ「オタク」として少数者であることを余儀なくされ、他者との交感を阻まれてきた者の解放の象徴となった。

こうして、マイノリティ的な嗜好を持つと思われてきた者達は変化を起こしていった。最も大きな変化は「萌え」によって、自らの嗜好・価値観に、そして自分自身に自信と誇りを持てるようになったのだ。ネットワーク上のコミュニティは、人間関係の構造を大きく変える可能性を持っている。「オタク」はもはやマイノリティではない。ネットワーク上で、それは嗜好因子ごとに大きなコミュニティを形成している。その動向を、社会はもつと注視すべきである。

いずれにしても、今後もネットワークの発達にともなって姿を変えた「萌え」系の潮流は大きくなっていくだろう。その中で、多くのマイノリティな嗜好・価値観を持つ者達が自分の依拠する場を得たり、自分に自信を持てるようになっていたりする。その意味で、ネットワークには新たな人間関係の構築に貢献する可能性が秘められて、ニュータイプビジネスを生み出す可能性を持っていると私たちは信じている。マイノリティの顕在化は、これから少子化を歩む日本の解決の糸口にもつながるのかもしれないと、大きな期待をしている。